

[課題演習概要]

学習者中心の学習支援のためのツール開発
—大村はまの「学習のてびき」を対象にして—

浦 未 希
Miki URA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：大村はま，学習のてびき，Education2030，主体的・対話的で深い学び

1 研究の目的

2019年に公表された新学習指導要領では、予測不能な世界を生き抜く子どもを育成することを目的として、「主体的・対話的で深い学び」を推進している。OECD「Education 2030」でも、「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく姿勢・意欲を育成する必要がある」との指摘があり、「主体的・対話的で深い学び」を重視する教育にも重なる。

本研究では、大村はまの「学習のてびき」を活用し、学習者の「主体的・対話的で深い学び」実現に向けた「学習支援ツール」を開発する。

2 研究の計画

M2 前期	○大村はま「学習のてびき」の分析 「学習のてびき」が学習者の学習支援との関係把握
M2 後期	○分析に基づく学習支援ツールの開発と実施、及び考察

3 研究の内容

(1)大村はま「学習のてびき」について

①「学習のてびき」とは

「学習のてびき」(以下〈てびき〉と記載)には、単元の進め方、話し合いの仕方や意見の述べ方、教材を読むときの着眼点等、学習に必要な知識や手順が示されている。

学習者同士の「主体的・対話的で深い学び」実現のためには、学習者が個々の学習を深めていく段階において、対象世界との対話や自己内対話が不可欠である。〈てびき〉は、それを円滑にするた

めのツールとして活用できる。これは授業の冒頭等で学習者に提示され、それが一枚の紙であることもあれば、授業者の言動である場合もある。また、若木(2016:85)によれば、それぞれに異なる学習者の学習をサポートし、学習の成立と成功に導く機能を果たすとされる。

②〈てびき〉の学習者に対する役割

〈てびき〉が学習者の学習に対し、具体的にどのような役割を果たすのかを明確にするため、M2前期において、2類の〈てびき〉を用いて、学習者視点から「学習のてびき」がもたらす学習効果について実験・分析を行った。実験の詳細については「習者中心の教育の実現に向けて-学習形態・支援ツール・学習コミュニティを手がかりに-」(2021 若木・中村・浦・石倉)に記載している。

〈てびき〉の言葉を用いて、多様な他者と対話する体験から、〈てびき〉の学習者に対する役割として2つのことを捉えることができた。1点目は自身の内面に存在しても顕在化されていなかったことに気づくということである。もう1点は自己の考えとは矛盾する「他者」の考えに出会い、納得できない思いや、思いがけない視点が提示され、「対立やジレンマ」を感じるということである。前者は〈それぞれに異なる人生を生きている個々が自分の考えを持つために自身の特性を活かして学び、自身の考えを構築し、それを臆することなく感情に流されることなく、論理的に他者に説明する〉という〈学習者個々に求められる「責任ある行動」〉をサポートするものとなる。後者については、「対立やジレンマ」を生じさせることとなり、自身が自明としていた見方や捉え方を疑うこと、異なる考え方を提示されること、それらによって生じる価値の対立を調整したり、止揚することに機能する。

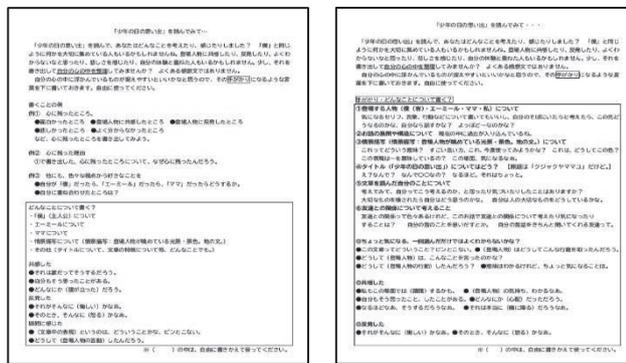
(2) 〈てびき〉を用いた授業実践

前述の分析結果を基に、M2 後期で作成した〈てびき〉を用いた授業実践を行った。教材は『少年の日の思い出』である。以下、授業の概要、及び使用した〈てびき〉を記載する。実践の詳細については、別稿「学習者中心の学習支援のためのツール開発—大村はま「学習のてびき」を対象にして—」(2022 浦)に記載している。

【資料1】「授業概要」

単元名	自分を見つける『少年の日の思い出』
時 数	全2時間
実践日	令和3年12月21日(火)4限 (1/2) 令和3年12月22日(水)5限 (2/2)
対 象	A 市立 B 中学校第1学年1組(37名)
詳 細	○1時間目 『少年の日の思い出』の思い出を通読後、登場人物や関係、物語の構造等を振り返る活動。 ○2時間目 ①子ども自身の感じたこと・考えたことを引き出すために、手がかりとなる言葉を複数示したてびきを用い心の中を整理する活動。 ②「てびき」を配布し使い方を説明。②本文を読み返したり、てびきを眺めたりする時間を設定。 ③その後、てびきの言葉をヒントに、本文を読んで考えたこと感じたこと等、自分の心の中を整理しながら書き出す活動。子どもの言葉を引き出すことが目的のため、文字数や形式は指定せず、単語や箇条書きの形で書き出す活動。 ④メモを基に、自分が感じたこと・考えたことの交流活動。

【資料2】「〈てびき〉—『少年の日の思い出』を読んで…—①(左)・②(右)」



において、怒れるのか分からない」というように、〈てびき〉に示された言葉に沿って学習者の感じたこと・考えたことが記されていた。このことから、学習者が教材を読み、自己の内面と対面・対話しながら、「独自の読み」として、感じたこと・考えたことを言語化するにあたり、〈てびき〉がその役割を果たしていることが明らかとなった。

一方、書くことが好きな学習者や、得意としている学習者が、〈てびき〉を使って書くことに苦戦している様子が見られた。これは、これまで積み重ねてきた学習の中で、「感想文の定型」というパターン化された思考が学習者の中に構築されていたことを示している。

課題は、今回使用した〈てびき〉と学習者の実情とのマッチングである。〈てびき〉は、個々に異なる学習者が自己の内面を探り、自覚したものを言語化することをサポートするものであり、学習者の学習状況や思考の傾向を日常生活や会話の中で探る必要がある。大村は、〈てびき〉の作成準備として、自身の頭の中や心の中を観察し、学習者の読みや理解・発想・思考等の学習状況を捉えるための「網の目」を構築していた。それに基づき、具体的な学習者の姿をイメージし、「あの子が読むとどう考えるのか」と、その思考過程を推測しながら作成した。しかし、今回の〈てびき〉は指導教員の思考の中で生まれた言葉がメインであり、実際の学習者の思考の傾向や言葉の捉え方とは乖離していた可能性があった。

本研究から、〈てびき〉が持つ役割や有効性が明らかとなった。しかし、〈てびき〉の開発・実践の過程で、実際の学習者の実情との擦り合わせや、授業者の立ち振る舞い等、追究課題も多い。今後の実習や授業の中で、明らかとなった課題を解決しながら、学習者中心の学習支援ツールとしての〈てびき〉の開発・改良を引き続き行っていく。

主な引用・参考文献

OECD 2018 「OECD Education 2030」 「教育とスキルの未来：Education 2030」 【仮訳（案）】
https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf (2022/1/6 最終確認)
 OECD 2020 「2030年に向けた生徒エージェンシー」
http://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf (2022/1/6 最終確認)
 若木常佳 2016『大村はまの「学習のてびき」についての研究—授業における個別化と個性化の実現—』(風間書房)

4 成果と課題

本研究の成果と課題について述べる。

成果としては、自分の考えを書くことを苦手としている学習者が、箇条書きの形で多く書き出している様子が見られたことである。学習プリントには、『珍しくなくていい』のはなぜか。自分なら珍しいものを集めたいと思った、「自分も〇〇が好きで集めているから、エーメールの気持ちがか分かるなあ」、「どうして人のものを盗んで壊して